様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４４０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０４３２６

研究課題名（和文）グループディスカッションでコミュニケーション能力を高める学校教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a school education program that enhances communication skills through group discussions

研究代表者
西口　利文（NISHIGUCHI, TOSHIFUMI）

大阪産業大学・全学教育機構・教授

研究者番号：７０３４３６５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は，グループディスカッションを通じてコミュニケーション力などの能力を高める学校教育プログラムの開発を念頭に置いたものである。グループディスカッションが学校教育に効果的に機能するための留意点である，「グループディスカッションの参加者の構成」および「適切な学習課題の準備」に特に焦点を当てた検討を行った。
　本研究では，以下の２つの知見を示した。（１）グループディスカッションの参加者の特性によって，発言の内容に特徴が現れる。（２）教科や単元を踏まえて教師が独自に開発するグループディスカッションの学習課題は，深い認知過程を学習者にもたらすことを促す可能性をもっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の成果は，義務教育段階の学校教育のもと，グループディスカッションを導入を通じて，児童生徒にコミュニケーション力をはじめとした能力を育むことが可能であること，そしてそうした機会は幅広い教科や単元で実践しうることを示した。次期学習指導要領に示されるとおり，「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が期待される中，グループディスカッションという活動の学校教育の場での活用の可能性について，実証的な知見を積み上げたことに，本研究における学術的および社会的意義を指摘することができる。

研究成果の概要（英文）：It is important to develop a school education program that enhances communication skills through group discussions. The study focused on "organizing proper grouping in discussion" and "appropriate learning task preparation", which are important points for group discussions to function effectively in school education.
The study showed the following two findings. (1) Depending on the characteristics of the group discussion participants, features appear in the content of the remarks. (2) The group discussion learning tasks independently developed by the teacher based on the subject or unit have the potential to promote the introduction of deeper cognitive processing to the learner.

研究分野：教育心理学

キーワード：グループディスカッション　学校教育　セルフマネジメント

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)グループディスカッションの意義

グループディスカッションとは，Galanes & Adams (2012)によれば，「理解深化，活動調整，共有された問題解決などのような，何らかの相互依存的な目標達成に向けた，集団で取り合うコミュニケーション」である。グループディスカッションを教育場面で用いることは，学習者のコミュニケーション能力を高めることに資すると考えられる。その理由として，グループディスカッションの実践過程では，学習者には次の２つの能力が必然的に求められるからである。

ひとつは，グループディスカッションのメンバー間の基本的ルールでもある，論理的思考に従った言語表現のスキルである。もうひとつは，各メンバーの異なる主張を調整するためのアサーティブ行動（菅沼，2011）を基盤とした言語表現のスキルである。たとえば，当該研究期間に研究代表者が実施した対人関係に問題を感じた大学生を対象とした実験では，グループディスカッションを含むグループでの活動経験が，自己の内面を理性的にコントロールしつつ周囲の期待も留意した行動を促すことを確認している（西口・市川・橋本・前川，2017）。このことは，グループディスカッションの実践が，論理的でかつ自己と他者の両者の視点を踏まえた言語表現スキルを育むことにつながることを示している。こうしたことに着眼し，本研究は，グループディスカッションを通じてコミュニケーション能力を高める学校教育プログラムの開発につながる知見を示すことを目指してすすめられたものである。

(2)学校教育の場におけるグループディスカッションの実践上の留意点

人間の単なる寄せ集めでグループディスカッションを企画したとしても，その集団が質の高いグループディスカッションを行う保証はない。このことは，社会的手抜きや集団浅慮といった，さまざまな社会心理学から導かれた概念からも理解することができる。すなわち，グループディスカッションを学校教育の場で児童生徒に活用する場合も，安易な実践ではネガティブな現象が見られることが予見できる。特に，学校でグループディスカッションの実践を支える教育プログラムを開発するにあたっては，次の３点について留意が必要であると考えられる。

1)グループディスカッションの活動への責任

グループディスカッションに参加する児童生徒が，グループディスカッションに対する責任を負うことは，その活性化に大きく左右される。ここでの責任とは，コミュニケーションを行うことへの責任，グループディスカッションで扱う問題や目標の解決や達成に対する責任，考えを深める前提となる個人での思考することへの責任などが含まれる。なお，こうしたことの重要性については，協同学習の考え方において踏まえられてきた。

2)グループディスカッションの参加者の構成

グループディスカッションにおいて，参加者が自分の考えを深めるためには，お互いに異なるものの見方や考え方に触れることが必要条件となる。そのため，学校教育の場での導入において，参加者のグルーピングをある程度考慮することは，児童生徒が相互に考えを深め合うことにとって有意義であると考えられる。

3)適切な学習課題の準備

グループディスカッションに積極的に参加者が関わるには，その活動に対して価値を見いだすことも重要となる。学校教育の場において，児童生徒がグループディスカッションへの価値を見いだすかどうかは，その場で扱われる課題に拠るところが大きい。また課題の設定を工夫することにより，個人で考えるよりもグループで考えることに意義を見出し，そのことが活動に対する責任感を高めさせることにもつながると期待できる。

このことを踏まえるならば，教師が，教育目標に沿った学習課題を，授業づくりの中で独自に準備できることが，幅広い教科や単元で，グループディスカッションを導入する上で重要なことであると言える。そして教師の開発した学習課題をもとに授業を実践するとなれば，その学習課題の質は，必然的に授業全体での児童・生徒の学びの質にも大きく影響が及ぶという点である。さらに次期学習指導要領も踏まえれば，教師によって開発される学習課題は，児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」をどの程度実現することにつながるかにも影響していくことも意味する。とりわけ「深い学び」の実現は，開発された学習課題の質によって，きわめて直接的に左右されるものと考えられる。

1)については，協同学習に関する研究でこれまでも扱われてきているが，学校教育でのグループディスカッションの導入を考えたときに，2)および 3）の課題については，これまで十分に検討されてきたとは言い難い。そこで本研究では，学校でグループディスカッションの実践を支える教育プログラムの開発という視点から，上述の 2)および 3）の留意点に焦点を当てた検討を行うことにした。

２．研究の目的

本研究では，義務教育段階において，グループディスカッションを通じてコミュニケーション能力を高めるプログラの開発を念頭に，２つのことを目的とした研究を行った。一つ目は，グループディスカッションの参加者の特性とグループディスカッションの発言内容との関連の検討である。二つ目は，教師が開発する学習課題の質について，現職の教師によって校内研修で開発された学習課題を対象にして検討することである。

３．研究の方法

学校のフィールドを対象とした，２つの目的に応じた２つの実験的なアプローチにより研究を行った。一つ目は，小学校での授業を対象とした検討であった。二つ目は，中学校における校内研修を対象とした検討であった。

４．研究成果

(1)グループディスカッションの参加者の特性と発言との関連

公立小学校３年生の学級に在籍する児童 28 名（男児 11 名，女児 17 名）を対象とした検討を行った。

グループディスカッションの参加者の特性を把握するために，大学生の「セルフマネジメントの行動意図」（西口他，2017，2018）を測定するための 36 項目を，小学生版に表現を直して使用した。各項目は，「1．あまりあてはまらない」「2.すこしあてはまる」「3．まあまああてはまる」「4.ひじょうにあてはまる」の４件法で回答を求める形式とした。対象児童への実施後，回答の因子分析（最尤法，プロマックス回転）をして２因子を抽出した。各々に負荷量が高い項目をもとに，「開発マネジメント」，「予防マネジメント」と いう下位尺度を設けた（Table1）。

Table1 小学生の「セルフマネジメントの行動意図」を測定する下位尺度項目

「開発マネジメント」（4項目，α＝71）
自分がたのまれたしごとは，かんぺきにしようと，どりょくしている。
ふだんから，いろいろなことを，すすんでしらべるようにしている。
自分とはちがう人の立場に立って，ものごとを考えることができる。
自分がまわりの人に，どんなことをきたいされているかについて，知ろうとしている。
「予防マネジメント」（3項目，α＝.76）
ふだんから，友だちとけんかをしないように気をつけている。
ふだんから，自分にまかされたしごとで，ミスをしないようにしている。
きめられたルールにしたがって，こうどうすることができる。

対象児童の学級を対象に，４回の道徳の授業の中で行われた３～４名１組のグループディスカッションでの発言を，ボイスレコーダーとビデオカメラを通じて記録した。いずれの授業回においても，物語教材の登場人物等の心情や行動意図，さらには授業全体を踏まえた上で人間として大切なことについて話し合う機会が計３回（全体で計 12 回）設けられた。そのうち，「登場人物等の行動意図」および「人間として大切なこと」について話し合われた７回分の話し合いでの発言内容を，「開発マネジメント」に関する発言，「予防マネジメント」に関する発言に分類して各々の発言数を導いた。ただし同じ内容の発言の繰り返しは１回の発言数とみなした。

分析の結果，児童たちが回答した質問紙における「開発マネジメント」の尺度得点と，彼らのグループディスカッションのもとでの「開発マネジメント」に関する発言数との間に，有意な相関（r=.43，p<.05）がみられた（Table2）。児童が自らの生活の中で重視する行動意図が，道徳の授業でのグループディスカッションでの発言に反映しうることを確認した。少なくとも『児童の多様な感じ方や考え方に接する』という道徳の授業において，グループディスカッションを取れ入れる際に，児童の心理的特性を踏まえたグループ編成を留意することには意義があることを明らかにした。今後は，幅広い教科や単元，異なる学年の児童生徒においても，同様な現象がみられるかについて検討していく必要がある。

Table2 児童の「セルフマネジメントの行動意図」の尺度得点と
グループディスカッションでの発言数との相関係数

		グループディスカッションでの発言数		
		開発マネジメントに関する発言数（発言１）	予防マネジメントに関する発言数（発言２）	発言１と発言２の総数
尺度得点	開発マネジメント	.43 *	.18	.37
	予防マネジメント	.24	.23	.28

注 ： 同じ内容の発言の繰り返しは，１回の発言数とみなした。
* p<.05

(2)教師が開発するグループディスカッションで用いる学習課題の分析

大阪府大東市の公立中学校に勤務する教師 25 名（管理職を含む）が参加する校内研修を対象に分析を行った。

本研究は，筆者が講師を務めた公立中学校の校内研修『授業づくりのための課題設定の探究』に関する取り組みを扱ったものであった。校内研修の２週間前より，「『１．課題』『２．思考を促す手続き』『３．責任を負わせる（高める）手続き』（３は任意）を柱とした『主体的・対話的で深い学び』の授業を各教師が個別に検討し，それをＢ５サイズの用紙に適宜まとめる」という課題が，当該校の研修を担当する教師から提示された。校内研修の当日は，各教師が上述の用紙を持ち寄り，教科別の６グループ（国語，社会，数学，理科，英語，保健体育）および教科の枠を超えた１グループ（音楽・美術・技術家庭）の合計７グループ（１グループは２～５名）に分かれ，最終的に１つの学習課題に基づく授業のアイディアをグループ別にまとめるという形式で進められた。90 分間の校内研修のうち，グループ内で授業のアイディアを検討する時間は，中ほどの 30 分程度が設けられた。その前後の時間は，各グループで提案された授業の全体へのシェアリング，ならびに筆者による補足や解説の時間に充てられた。なお，研修の内容を研究目的で分析することについては，当該学校および研修に参加した教師からの同意が得られた。
実施月：対象となった校内研修は，2018 年８月に実施したものであった。
分析対象：各グループで提案された授業については，ホワイトボードにまとめられた。それをデジタルカメラで記録した画像をもとに，生徒の「深い学び」の実現にどのように結び付いているかを確認することとした。

「深い学び」の実現を推察する視点として，認知的領域の評価規準を表す「改訂版タキソノミー」（Anderson & Krathwohl，2001）にある「記憶する」「理解する」「応用する」「分析する」「評価する」「創造する」の各認知過程を表すカテゴリーを参照した。そして，このカテゴリーに照らして提案された授業の学習課題を概観し，実際に生徒が学習課題に向き合ったと仮定した場合に，いかなる認知過程の学びが生起するかについて確認を行った。

各グループから提案された学習課題は，「記憶する」「理解する」という認知過程を基盤として，深い認知過程をもたらす「応用する」「分析する」「評価する」「創造する」といった活動を，生徒に促すことがうかがえる内容であった。すなわち，教師が開発する学習課題については，少なくとも教科の専門性をもつ教師たちによる熟考ならびに教師間の相互作用のプロセスを経ることを通じて，生徒たちの「深い学び」を実現するための授業を支える内容であることを示した。

今後の課題であるが，教師によって開発される諸々の学習課題が，実際の児童生徒の学びに対して，授業で念頭に置かれた教育目標どおりに，あるいはその他いかなる形で寄与しうるかについて，実証的に検討する必要がある。また，教師自身が，開発された学習課題がいかなる認知過程を育む授業になるのかに関する明確な視点を持つことによって，授業に関する実践的力量を高めることに資するのではないかと推察される。そのため，認知的領域の評価規準およびそれに関連する学習課題の例に関する教員研修を実施し，その効果を検証していくという意義はある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①西口利文・谷田信一・定金浩一・塩見剛一　（2017）．　社会人基礎力に通じるセルフマネジメントと授業での大学生の学習活動との関連，大阪産業大学論集 人文・社会科学編，査読有，29，15-25.

②西口利文・定金浩一・谷田信一・塩見剛一　(2018). 社会人基礎力に通じるセルフマネジメントが授業でのパフォーマンスに及ぼす影響, 大阪産業大学論集 人文･社会科学編, 査読有, 32，35-54.

〔学会発表〕（計５件）

①西口利文　2016 年 11 月 5 日．　賛否両論図を用いたグループディスカッションでの認知過程の検討　日本協同教育学会第 13 回大会（三重大学）

②西口利文・定金浩一・谷田信一・塩見剛一　2017 年 3 月 25 日．セルフマネジメントが授業でのパフォーマンスに及ぼす影響　日本発達心理学会第 28 回大会（広島国際会議場）

③西口利文・市川哲・橋本尚子・前川一也　2017 年 9 月 23 日．　対人関係に問題を感じる青年を対象としたグループワークの効果－内的不適応状態の改善に焦点を当てた分析－　日本カウンセリング学会第　50 回大会（跡見学園女子大学文京キャンパス）

④西口利文・中野真悟　2018 年 9 月 16 日. 児童のセルフマネジメントとグループディスカッションでの発言との関連－小学校３年生の道徳授業からの分析－　日本教育心理学会第 59 回総会（慶応義塾大学日吉キャンパス）

⑤西口利文　2018 年 11 月 18 日．教師が開発する主体的・対話的で深い学びの学習課題の分析　日本協同教育学会第 15 回大会（梅花女子大学）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。